

特集

歴代受賞作品を紹介

保存版

ケイト・グリーナウェイ賞



イギリスで出版された子どもの本のなかで、その年の最もすぐれた作品の画家に対して贈られるケイト・グリーナウェイ賞。

毎年6月に、前年発売された本のなかから受賞作品が発表されます。イギリスの絵本にくわしく、グリーナウェイのファンでもある翻訳家の灰島かりさんのお話と、歴代の受賞作品をご紹介します。

19世紀のヨーロッパで
10万部売れた
グリーナウェイの絵本

ケイト・グリーナウェイはイギリスの代表的な絵本作家で、彼女の名を冠したケイト・グリーナウェイ賞（以下グリーナウェイ賞）は、イギリスの子どもの本に与えられる権威ある賞です。

木版彫刻師の父とドレスメーカーの母との間に生まれたケイトは、12歳のとき絵の勉強を開始。22歳ごろから個展で作品を発表したり、児童書のイラストなどを手がけており、1884年に刊行した『花言葉』は、遠くアメリカでも話題に。

そして、1879年に発表した最初の絵本『窓の下』は19世紀当時、10万部ほど売れたといわれ、大人気を博しました。この数はフランスやドイツでの販売部数を入れてのものですが、お金を出して子どものために絵本を買うのは、アッパーミドルクラス以上の限られた層でした。今でいう100万部のベストセラーと同じくらいの意味を持ちます。

彼女が描く絵は一世を風靡し、絵本に登場する子ども服をイギリスのテキスタイルブランド、リバティが『グリーナウェイドレス』として売り出し、大流行したほど人気があったのです。グリーナウェイが生きていたヴィクトリア時代のドレスは、ウ

エストをキュッと締めて、ペチコートをはき、スカートをふわっと広げた、非常に堅苦しいものでした。子どもたちにとっても、洋服を着るのはとても大変なことで、乳母に手伝わってもらわないととても着られないくらいいたくさんのボタンがついていたのです。

それに比べると、しなやかな生地のできたグリーナウェイドレスは、胸の下でとめて、ストンとしたAラインになる服だったため、とってもラク。これにちよつと大きめの帽子をかぶるのはヴィクトリア時代のひとつ前、クイーン・アン時代に流行ったスタイルでした。

グリーナウェイという人の魅力はどこにあるのかというと、この世と別の世界とのすきまにある、どこともいえない不思議な場所を描いたところではないかと思えます。お母さんが赤ちゃんを乳母車に乗せてカラカラと動かししている絵なのだけであって現実でない場所。それを『境』^{境界}というのですが、これを描くことができた作家で、だからこそ永遠の名声を保っているのではないかと思ふのです。

芸術性が高く、視覚的に満足させるものに与えられる賞

グリーナウェイ賞は、コルデコッ

ト賞と比べると、日本ではちよつぴりなじみが薄いかもしれませんが、邦訳されている作品も若干少ないのは、日本の読者にはアメリカのほうがなじみがあるほかに、グリーナウェイ賞が作品に何を求めているかという点にも理由があるのではないかと思います。

グリーナウェイ賞は、芸術性が高く、視覚的に満足させるもの、という審査基準を前面に掲げています。絵本として完成度が高いもの、テキストと絵が魅力を持つてぶつかりあっているもの、という審査基準はコルデコット賞もグリーナウェイ賞も共通していますが、コルデコット賞には、芸術性（英語でいうアーティスティック・クオリティ）という言葉がないんですね。

グリーナウェイ賞については「この絵本は素晴らしいけれど、芸術性としてはどうかしら」とてもなじむけれど、視覚的に新しいものではない」といったことが授賞をためらわせる要因になるわけですから、賞の持つ目的や理念には、その国の賞を与える人たちのスタンスがとてもよくあらわれているといえるでしょう。

そしてもうひとつ、イギリスの今の本に求められているものが、アンソニー・ブラウンとジョン・バーニングラム以降、ポストモダンなものになり、意味が伝わりにくいものに

2013年から1955年までをさかのぼって紹介

2012

『怪物はささやく』

著/パトリック・ネス
原案/シヴォーン・ダウド
イラストレーター/ジム・ケイ
訳/池田 真紀子
1,600円 (あすなろ書房)

イチイの木の怪物が13歳の少年コナーのもとへやってきて、「わたしが三つの物語を語り終えたら、今度はおまえが四つめの物語をわたしに話すのだ」と命令します。コナーが語るべき真実とは？ 全221ページ。



2013



『ブラック・ドッグ』

作/レーヴィ・ピンフォールド
訳/片岡しのぶ
1,400円 (光村教育図書)

ある日、ホープさんの家の前に黒いイヌがやってきました。そのイヌはどんどん大きくなって、ばけものみたいに！伝説の「ブラック・ドッグ」なのでしょうか。一家が大混乱するなか、まっちゃんのチャイは外へ飛び出します……。



2010

『さよならをいえるまで』

文/マーガレット・ワイルド
絵/フレヤ・ブラックウッド
訳/石崎 洋司
1,400円 (岩崎書店)

ハリーとイヌのジャンピーは、大の仲よし。何をしても一緒でしたが、ジャンピーが事故で死んでしまいました。ジャンピーの死を受け入れられないハリーは……。フレヤの繊細な絵がハリーのナイーブな心を見事に表現。



2011

『FARTHER』

作/ Grahame Baker-Smith

子どもの本にまつわる3つの大きな賞

グリーナウエイ賞は、国際アンデルセン賞、コルデコット賞と並び、子どもの本にまつわる大きな賞で、イギリスで出版された子どもの本のうち、英国図書館情報専門家協会の審査により、最もすぐれた作品と画家に対して、年に一度贈られる賞です。

これらの賞のうち最も古いコルデコット賞は、イギリスを代表する挿絵画家ランドルフ・コルデコット(1846(86)を記念して名づけられた賞で、1938年に創設され、その年にアメリカで出版された最もすぐれた絵本の画家に対して贈られます。

一方、グリーナウエイ賞はコルデコット賞に遅れること17年、1955年に英国図書館協会によって創設された賞で、その名は同じく19世紀に一世を風靡した絵本画家、ケイト・グリーナウエイ(1846(1901)にちなんでいます。

国際アンデルセン賞は翌年の1956年、国際児童図書評議会(IBBY)により創設され、現在ではご存じのように「小さなノーベル文学賞」ともいわれています。余談ですが、コルデコットと、グ

リーナウエイはいずれも1846年イギリス生まれ。その1年前にはウォルター・クレインが生まれていて、19世紀後半の同じ時代にイギリスで活躍した3人の画家は、現代絵本の源流となり、その後の絵本画家たちに大きな影響を与えました。

彼らに面識や交流があったかどうかはわかりませんが、3人には共通の人物がいます。それは、彫刻師で印刷業者のエドマンズ・エヴァンズです。グリーナウエイの父親は木版彫刻の職人でしたが、その友人だったエドマンズ・エヴァンズは、時代の流れを見据え、立派な絵本を出せば市民階級の人々に売れるという天才的な読みで成功。今でいう、腕利きのプロデューサーだったのでしょう。クレイン、コルデコット、グリーナウエイの才能を見出しました。

日本の浮世絵は板日本版といって、木目を縦に使うことで流麗な線が表現できます。一方、エヴァンズはこれにヒントを得て、木を輪切りにして木目を横に使う小口木版で高い技術を駆使しました。年輪が見える板を使うことで手間はかかりますが、細かい線が出せ、繊細で彩色の美しい絵本を生み出しました。



この人にあれもこれも

こんにちは!
絵本作家さん

おめでとう!

30周年

むらかみ やすなり
村上 康成さん

毛穴に向かって描く絵本

清流に住む川魚・ヤマメが主人公の絵本『ピンク、べっこん』にて第1作を発表以来、“自然のなかで感じる皮膚感覚”がよみがえるような作風で人気の作家・村上康成さん。

28歳でのデビューから、走り続けてきた30年の軌跡を追います。

撮影/石川 正勝 取材・文/菅原 千賀子

愛して怒って
自然と向き合う

僕は自然のなかでいろんなことを感じながら絵本をつくってきた。ときに「怒り」をたずさへながら。生まれたところは岐阜県の郡上八幡。お盆の徹夜踊りで知られる有名な地です。初夏になると、町の人はそわそわし始める。海からの使者が、100km離れた伊勢湾の河口を上り、長良川を旅してくるからです。彼らはアユやアマゴ。アマゴは海に下り、サツキマスとなり、再び生まれた地へ戻ってくるわけです。お年寄りも子どもも川をのぞき込んで「今年もアユがいっぱいおるのう」と顔をほころばせる。祭り囃子が流れ、橋の上では夏の夜に盆踊りを楽しむ。いい景色です。受け継がれてきた自然の営みが、みんなのエネルギーになっているんですよ。

長良川は日本有数のダムがない大河だった。しかし、健康な自然が人の手によって壊され続けた。「何のために?」ということが多すぎる。

自然と向き合い、ときにはその無謀な破壊に憤りを感じながら絵本を描いてきました。絵本とは、「すこやかな笑顔が含まれた幸せなもの」でありたいと思っているから、切ないです。愛して、怒って……。複雑な思いが僕の創作の芯になっているんですよ。

被災地に子どもの本が できること in 陸前高田



震災で犠牲になった長男の遺志を 「ハナミズキのみち」として未来に残す

東日本大震災で甚大な被害が出た、岩手県陸前高田市。
海岸沿いの風光明媚な町は壊滅状態となり、大勢の方が津波の犠牲になりました。
その中には、ギリギリまで町の人々の救助に尽力した浅沼健さん(当時25歳)もいました。
母の浅沼ミキ子さんは夢の中に出てきた健さんとの約束を形にしようと、
1冊の絵本をつくりました。



7万本ともいわれた防風林の中でたった1本残った松が「奇跡の一本松」としてさまざまなメディアで紹介されました。

泣いてばかりの日々に
健が語りかけてくれたこと

浅沼ミキ子さんは国道沿いにある観光物産協会で働いていました。年度末を前に忙しい日々を送り、その日の午後は市役所の1階ロビーにいて、あの震災に遭遇。立っていられないほどの激震に、ただごとではないと直感します。長い揺れがおさまったあと、一旦自宅に戻ろうとしていた途中、市役所の前で偶然、健さんと会うことができ、お互いの無事を確認。それから連絡がとれない日々が続きますが、連絡がとれないのは、みんな同じ。どこかの避難所で、みんなを助けているのかもしれないと思うものの、行方がわからない日

が続き、不安を募らせます。それから10日後、健さんとの再会は無言のものとなりました。

それからは泣いてばかりの日々。泣いて泣いて……。眠れない夜が続きました。一度は無事を確認していながら、なぜ一緒に連れて帰らなかったのか、なぜ、高台へ避難するよう声をかけなかったのか。後悔の念をノートに書きためます。

そんなある夜、健さんが枕元で話し始めます。

「母さん、大好きなこの町に大津波が来て、たくさんの方の命が奪われたことを、後世の人たちに伝えて。そして、避難路に沿ってハナミズキの木を植えてほしい。早春に咲くハナミズキが、安全な高台へ導いてくれる避難路だとみんなにわかるように」
……気がつくと、朝になっていました。

ミキ子さんは生かされた自分たちがすべきことを知らされた思いがしました。これからの陸前高田が再び美しい、安全な町に復興するために重要な役割があると。

そんな思いをこめて、ノートに書きためたものをもとに1冊の絵本をつくりました。小さな子どもでも覚えていけるように。

著作権保護コンテンツ



『ハナミズキのみち』

文/浅沼 ミキ子
絵/黒井 健
1,300円(金の星社)

サイン本
プレゼント
Webまたは
アンケート
用紙へ

絵本の前半は美しい高田松原の海岸線、きらきら光る海、七夕まつり、夏の花火大会と、楽しかった故郷の景色がまばゆいばかりに展開します。後半、「あのとき」で始まる震災の場面を機に風景は灰色に一変し、文章のない場面が続きます。

人 づてにご紹介いただいた編集者の野上さんは、絵本のことなど何もわからない私に、ひとつひとつ丁寧に教えてくださいました。自分の内からあふれ出す言葉も何度も書くのですが、なかなかうまく伝わる言葉にできませんでした。テキストの推敲を重ね、そぎ落とし、なんでこの言い方ではダメなんだろかと、ずいぶん試行錯誤しました。絵を描いていた黒井先生は以前から大好きな作家さんでしたので、とてもうれしかったです。こんな立派な絵本にしていたいただいたのも、おふたりのおかげです。ありがとうございます。



浅沼 ミキ子さん



第20回 東京国際ブックフェアでの震災復興支援プログラムとして、作者の浅沼さん、絵を描いた黒井さん、編集者の野上さんによる鼎談が行われました。この絵本をつくるにあたって、3人それぞれの作品への思いを伺いました。

● 編集部より
鼎談のあとのサイン会では長蛇の列ができて、集まった方たちの関心の高さがうかがえました。絵本ができる前に、この3人と陸前高田市市長との面談では、避難路にハナミズキを植え、「ハナミズキロード」とする計画も話題にあがったそうです。具体的なことはこれからですが、すでにハナミズキの苗の寄贈を申し出ている団体もいくつかあるそうです。けれど、まずは更地になった土地に8mにも及ぶ底上げをしてからの再開発です。それまでに7~8年が費やされるだろうといわれています。「一歩一歩の復興を前に、まずは語り継ぎ、風化させないことが私たちに今できることではないでしょうか。」

最 初にいただいた原稿は「大好きな俺たちの町」という一文で始まっていたんですね。浅沼さんは25歳の健さんの等身大の言葉でつづりたかったのだと思います。でも、より大勢の子どもたちに読んでもらうとなると、目線を子どもものそれに下げなければなりません。それで、主人公を小さな男の子にして、その子の目を通して美しかった町や楽しかった様子を語る形にしました。絵は美しい風景を情感豊かに描き上げる黒井さんをお願いしたところ、快く引き受けていただき、取材のため何度も現地足を運ぶなど、精力的に取り組んでくださいました。



野上 暁さん

日本ペンクラブ常務理事。出版社で子どもの本の編集に携わり、出版部長、取締役などを歴任。

震 災のあと、自分には何ができるだろうと、ずっと考えていました。このお話をいただいたとき、はたして自分に描けるだろうかと思いました。というのも、自分は大災害をテレビでしか見ていない。この温度差をどうしたらいいのかと。しかし、お受けしてからは被災地を訪ね、町の様子をつぶさに取材し、浅沼さんやご家族とお会いして昔の写真も拝見しました。美しい町の風景は描けるのですが、地震や津波の場面は描こうとしても筆が止まってしまうのです。ずいぶん描けない日が続きました。ようやく描いても納得のいくものにならず、何度も描き直しました。この絵本がひとりでも多くの方の手に届くことを願っています。



黒井 健さん

やさしい画風が人気の絵本作家。2003年黒井健絵本ハウス開館。2010年、出身地である新潟県の新潟市立中央図書館こどもとしよかんの名誉館長に就任。